発問例

●二二八ページ

問 **「その不安定なもの」（12 行目）とは、どのようなことか。**

答 自分が家を所有しているという確信が持てないということ。

●二二九ページ

問 **「すべての因がそこにあるようであった。」（1 行目）とあるが、「彼」は何に気付いたのか。**

答 家を建てたときから抱いていた落ち着かない気持ちや、電気屋や写真班に何を言われても言い返せないことの原因が、購入金額の多くを借金が占め、自分のお金で支払ったのではない点にあったということ。

問 **◉「自分がこの家の付属物であるような」（2 行目）気がするのは、なぜか。**

答 「彼」は借金をして家を買っており、家のすべてを自分のものだと言えるか疑わしくなっているから。

補 敷衍すれば、借金を返すまでは働き続けなければならず、自分の意志で家やものを動かしているというよりは、家に自分の人生が従わされているようだから。

問 **「まずいけれども食べ残すわけにはいかないような気持ち」（6 行目）とは、どのようなものか。**

答 ソバだけが自分の持ち物であるような気持ち。

補 家を所有しているという自信を失った「彼」にとって、今や目の前にあるソバだけが所有できるもののように見え、それを食べ残すということは所有物に対する自らの権利を放棄するような気持ちになっている。「ザルを持って立ち上が」るのもその表れと見ることができる。

問 **◉「僕をどけろと言うんですか。」（10 行目）と勘違いしたのは、どのような気持ちになっていたからか。**

答 「彼」は借金をして家を買っており、家のすべてを自分のものだと言えるか疑わしくなっているから。

補 自分は、家や家具のような「もの」に対して主人であるはずだが、棟木やガラス窓と等価値であるかに感じ、その存在の重要性に自信が持てなくなっていたから。

●二三〇ページ

問 **◉「光を発さない光源体みたいな感じ」（14 行目）とは、どのようなことか。**

答 あるものが、他でもないそれであることを示すもっとも重要な特徴や性質を欠いている状態。不条理でもあり、無意味でもあり、滑稽でもある。

補 この表現によって、自己存在の混乱は深遠なものとしてイメージされるが、その打破が、ソバという卑近なもので妨げられるところにユーモアがある。

問 **「そいつをぶち破る」（14 行目）とは、どのようなことか。**

答 写真班に反論することと、自分が置かれた状況を打開すること。

補 複数の意味が込められている。

語句の研究

●二二八ページ

キー・ポイント　つまり俺がまごまごと押し戻されてしまうのは　「押し戻され」るとは、電気屋に肩を押されたという身体的、現実的な内容を指すと同時に、電気屋や写真班の発言の勢いに対抗することができずにいる状態をも指す。「つまり」という語には、電気屋に実際に肩を押された経験と、現在の自分の立場とを重ねて捉え、後者が

持つ意味合いを「彼」が了解した瞬間が示されている。

12 その不安定なもの　家が自分の所有物であるという明確な了解を持てていないことを指す。

16 まつわり　つきまといの意。

16 物腰　態度。

●二二九ページ

1 因　物事の原因。

5 その二筋三筋を引き剝がして　「引き剝がさなければならないほど蕎麦が固まっていることからは、それだけの時間の経過があることが窺える。また、蕎麦が日常の象徴であるとすれば、「彼」をめぐる物事がスムーズに進まないことや、「彼」が思うように行動することの困難を示しているとも見える。

キー・ポイント　やはり少し声が高くなった。

この直前まで電気屋に関する回想場面が差し挟まれているため、物語内現在において直前の「彼」の発言は「これは住宅金融公庫の、外郭団体か何かですか？」（二二五・6）まで遡らねばならない。すると、「やはり」の語は前の発言との比較においてではなく、回想を経た「彼」自身の気付きの内容に関わるものとして読むべきである。家と自分との関係の不確かさに対する苛立ちと不安とが、「少し声が高く」なることと繋がっている。

12 なだめるように　怒りや不安などをやわらげ静めるように。

15 具合が悪い　体裁が悪い。都合が悪い。

16 肩をそびやかして　肩を高く上げ、威勢のよさそうな態度を見せて。直後に「すぐに肩を元の高さに戻した。」（二二九・16）とあり、虚勢に過ぎなかったことがすぐさま明かされている。

●二三〇ページ

1 次の間　主要な部屋に隣接する部屋。「彼」の家の場合、茶の間が主要な部屋に該当する。「部屋はもうこれだけしかない。」（二三〇・1）とあることから、茶の間をダイニングルームと捉えれば、いわゆる１ＤＫの間取りであることが窺える。また、電気屋に対して「彼」が言った「奥の間」（二二六・3）はこの部屋のことである。

3 不法なこと　道理や道義に背くこと。

キー・ポイント　彼はそれを全部無理やりに口の中に押し込んだ。　蕎麦は伸びて固まっており、それを「彼」自身が既に「ひどくまずい」（二二九・6）とも言っていたにもかかわらず全て頬張ったのは、「食べ残すわけにはいかないような気持ち」（二二九・6）があったからである。

11 しげしげと　物をじっと見つめるさま。つくづく。よくよく。

13 植木市　植木屋が栽培した植木や草花、盆栽、苗木などを持ち寄る露天市。十八世紀から盛んになり、主として寺社の縁日などに立つ。

14 光源体　それ自体で光を発する物体。発光体。

キー・ポイント　何か叫び出そうとしたが、口いっぱいに詰め込んだソバのために、それはほとんど声にならなかった。　写真班が自分の家の最奥にある庭の存在を認識し、あまつさえそれを品評するような物言いさえするに至り、「彼」と家との所有をめぐる繋がりは完全に切り離されたかに見える。さらに、「彼」の存在自体が無視されていることも相まって、事態はより深刻になっている。それゆえ、「彼」は状況に抗おうとするが、どのように抗うかという方略はこれといってなく（「彼」が叫ぼうとした内容は「何か」とあるとおり、不明のまま

である）、方略があったとしても遂行するための手立てを奪われている（「ほとんど声にならなかった」）。こうした状態に導いたものは、「彼」の思惟（が思うように巡らないこと）と蕎麦であり、写真班の二人だけが直接的な原因だとは見做しにくい。勤め人の男性が日曜日の昼に食べるものとして、蕎麦は決して珍しくはない、平凡なメニューである。「ソバ」が「彼」の声を奪うという事態は、これまで疑うこともなかった自らの日常が「彼」に立ちはだかり、生存条件が不確定であることの問い返しを迫ったと見ることもできる。

注意する語句

（＊で用例を示した）

まごまご…どうしてよいかわからず、うろたえるさま。

＊入り口が見つからず、まごまごした。

しょぼしょぼ…力なく、あわれでわびしいさま。

＊悪いことが重なり、しょぼしょぼと帰路につく。

目障り…見て不愉快なこと。また、そのものや、そのさま。

＊駅前の看板は目障りだ。

目を白黒させる…苦しみで目をしきりに動かす。

＊餅をのどに詰まらせて、父は目を白黒させた。